

【国語科】教科提案

つながりを意識して考える力を育む

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかかわって

国語科では、「問い続け、学び続ける子どもたち」の姿を、文や文章の内容を追求していく中に見出していく。作品内容を追求する際、子どもたちは、作品中の言葉の意味やはたらき、文と文、言葉と言葉のつながりを考えることになる。感動、共感、反発など、作品に対して、自らの思いや考えを頭の中に巡らせる。そのような経験を積み重ねることで、子どもたちは言葉に着目し、自らの中に言葉を蓄積させ、その言葉を活用していく力を身につけていくであろう。

国語科では昨年度に引き続き、「つながり」をキーワードとして研究を進める。ここで言う「つながり」とは、言葉のつながり、他者とのつながり、学習のつながりととらえてきた。今年度は、学校提案を受け、学習のつながりに重点を置いて研究を進める。学習のつながりとは、単元内で子どもと教師が見通しをもちながら進めていく学習であると考えている。子どもが「知りたい」「読みたい」「伝えたい」と思えるような学習活動を展開していくのである。学習のつながりを子ども自身が意識できるようにしながら、考える力を育みたい。

(2) サブテーマに関わって

学校提案では、サブテーマを「子どもの言葉でつくる授業」としている。国語科における「子どもの言葉」は、「話す・聞く」「書く」「読む」活動にあらわれる。国語科の学習では、音声、文字、動作など、様々な方法の表現活動がおこなわれる。しかし、表現力育成を目標として、研究を進めるのではない。表現力も国語科で育成する要素であるが、本年度重点を置くのは、なぜそのような表現となったのかという思考の流れである。音読であれば、「本文に〇〇と書いているから」と教材文に立ち返る必然性が生まれる。思考を伴った表現活動がおこなえるような授業づくりをする。

さらに、「読みたい」「話したい」「聞きたい」と、学習活動に対する前向きな姿勢もまた、子どもの言葉ととらえている。そのような子どもの言葉が表れるための手立てとして、たとえば、単元に活用場を位置づけるといった工夫が考えられる。ただし、学習したことをすぐに活用に転じられる場合ばかりではないため、学年や学習の中身に応じて、教師による意図的な学習計画が重要となる。そして、その計画については、当該単元だけでなく、当該学年など長期的にみて、どのような言葉の力を身に付けさせたいかを考えることとなる。また、教材や他者、自己の学びに関わって学びを深めていける展開が、子どもの言葉でつくる授業へとつながると考える。

(3) 国語科でめざす子ども像

互いに認め合う中で表現することを楽しみ、言葉にこだわりをもち、自分らしい言葉が使える子どもを目指す。そのために、以下のような子どもたちの姿を期待している。

①主体的に読もうとする子

主体的に読むとは、進んで本を手にとりて読む姿だけでなく、作品を読んで「大事だな」と思う言葉や文章に注目し、そこに立ち止まって問いをもつことである。子どもたち自身が「読みたい」という思いをもって作品に向かい、学びを進めていける子を育てていく。自分自身や生活、経験に引き寄せるなど、主体的に学びに取り組むことにより、学習意欲が継続し、著者の思いに触れることができる。そのことにより自分の言葉が洗練され、想像力が高まっていくものとする。

②関わり合いを大切にできる子

教室が子どもたちの学び合いの場になっているか。子ども同士のつながりがある授業であったか。子どもたちが、友だちの読みについて知り、友だち、教師、教材と関わりながら、自分の読みとのつながりについて考えることができるよう学習を進めていく。発言や振り返りに友だちの名前が出てきたり、どんな学習の流れが元となった考えなのか子どもも教師も分かたりする授業づくりを目指す。

③学びの振り返りができる子

対象、他者との対話において、自分とのつながりを意識し、身につけた表現を駆使し自分の中にもった思いや考えを表現できるようにしていく。自分の認識がどのように変容したかを実感できることが重要である。

2. 国語科学習における「問い続け、学び続ける子どもたち」

低学年	中学年	高学年
<ul style="list-style-type: none"> ・学んだ文字や言葉を使って、文を書いたり話したりしようとする。 ・読書(読み聞かせを含む)を楽しむとする。 ・教師や友だちの思いや考えを聞こうとする。 ・自分の思いや考えを表現しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えの中心に気を付けながら、書いたり話したりして伝えようとする。 ・自分の考えと比べながら、相手の話を聞こうとする。 ・自ら言葉を調べ、語彙を増やそうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えが相手に伝わるように気を付けながら、書いたり話したりしようとする。 ・話を聞いたり、本を読んだり調べたりして、多様な考えに進んで関わろうとする。 ・自分の考えと比べながら相手の考えを聞き、自分の考えを再度振り返ろうとする。

単元を進めていく中で、子どもと教材、子どもと子どもがどうつながっていくかをみとる。ノートやワークシート、発言、授業の振り返り作文、座席表などから、子ども一人一人の思考の流れをみとる。そして、指導のねらいに即して、子どもと子どもの読みをつなげられるような発問や切り返しに生かす。

また、子どもの疑問や考えをみとり、子どもたちが気づいていないことに気づかせていくための教師の働きかけを考えたい。ペアやグループで、どのような話し合いになっていくか予想しておいたり、どのような話を期待したいかを考えたりしておき、ペアやグループへの支援にも生かしたい。

実践例「古典を読んで、あなたは『イイね！』できるかな、できないかな」(5年生実践)

本単元では、「枕草子」を、子どもと古典文学との出会いの場として設定した。「古文は何を言っているか分からないから嫌い」といったイメージではなく、「昔の言葉っておもしろい」という思いをもつことができるよう、古典文学との易しい出会いとなる学習にするよう取り組んだ。清少納言との出会いにおいては百人一首、デジタル教材を、「枕草子」との出会いにおいては、挿絵を導入で扱った。子どもにとって自然な学習展開にするために、前単元とつなげた学習展開にすることで、学習意欲の持続を促した。

「マイ枕草子」を作ることに決めた際、「春夏秋冬以外にも、南紀旅行(宿泊体験)の段を作りたい」という声が挙がった。その後の南紀旅行では、日本一と言われる那智の滝の前で、感じたことを夢中で言葉に書き綴っていた。それらのような姿から、子どもたちと古典「枕草子」との距離が縮まったと言えるのではないだろうか。

○創作に対して「何を書けばいいかわからない」「難しい」「はずかしい」と言って敬遠していた子どもたちが、進んで創作しようとするようになった。

○身近なこと(季節、校外学習)を題材とすることで、全員が意欲的に取り組んだ。

○「マイ枕草子」づくりに楽しんで取り組んだ。書くことが好きではない子どもも楽しむことができた。

○見たことを5・7・5音や文章で表現することを楽しむ姿が見られた。自分の心が動いた景色や一瞬を切り取ることの楽しさを味わっていた。

○「枕草子」の学習漫画を用い、挿絵を導入で使うことは、子どもたちにとってイメージが湧きやすかった。

○「枕草子」で使われている古語、歴史的仮名遣いに興味をもつことができた。

実際の学習過程

(2) 実際の学習過程

5A句会 春の句を読もう、詠もう	時	めあて	主な学習内容	指導目標
	1	句会で遊ぼう	絵本「どうぶつ句会」から春の俳句を読み、句の流れから言葉予想する。	・表現の仕方に着目することができる。
	2	俳句の名人に挑戦！ 小林一茶の俳句を読もう	「雪とけて 村いっばいの〈子どもかな〉」の〈 〉の部分予想して、言葉を考える。 春の言葉を集める。	・春を表す言葉に興味をもち、使い方に心をもちることができる。
	3	春の俳句を詠んで、5A句会！	春の俳句を詠み、互いに読み合う。	・感じたことを文に書き表すことができる。

第二單元 古典を読んで、あなたは「イイね！」できるかな、できないかな。	1	夏秋冬の「イイね！」を考えよう	夏秋冬のいいなと思うところを考える。グループで言葉を出し合い、付箋に書き分類する。	指導目標 ◎筆者の意見やテーマに対して、共感する点、共感できない点を見つながら、昔の人のものの見方や感じ方について知ることができる。 ○古典の文章を音読し、言葉の響きやリズムを味わう。
	2	清少納言ってどんな人	百人一首から清少納言に出会う。	
	3	「イイね！」を見つながら「枕草子」を読もう	「枕草子」で清少納言の季節の感じ方を読む。	
	4	自分も「マイ枕草子」の作者になろう	今まで集めてきた春夏秋冬についての「イイね！」について、文章にする。	
	5	決定！ベスト・オブ・マイ枕草子	グループで読み合い、グループ賞を選ぶ。選ばれたグループ賞を全員が読み、クラス賞を選ぶ。	

③子どもの感想

・春夏秋冬を考えるのがむずかしかったです。南紀旅行を思い出しました。枕草子を読んで分かった事は、春は明け方の方がいいと分かりました。いつも清少納言さんが空を見ていていいと思ったりわるいと思ったりしてたんだなあと思いました。枕草子のいいなと思った所は、かなしかったことや、うれしかったことが書いていて、きれいな空のことをどう思ったか書いていたところです。

・マイ枕草子を作るのは大変だったけど、この枕草子をみて、とてもやるきになったから、清少なごんという人はすごいなあと思った。とても心にのこった。

・全部、食べ物や自然から出来たもので作りました。友達の枕草子は旬のものがたくさんできて、とても春が分かりました。清少納言さんの枕草子は、自然のもので太陽や月があってとてもいいなと思います。春夏秋冬にはいろんな旬のものや人が作ったのがよく分かりました。またちがう物を作りたいです。

・枕草子を作るのはむずかしかったです。特にむずかしかったのは、文を丸(句点)でしめた後、つないでいくのがむずかしかったです。「春はおだやか」は、人々の目線から書きました。春は人々の気持ちや町や村の気候、夏は人々の思う場所を、秋は人々から思う「秋」のいいところを、冬は新年のことや寒いことを考えながら書きました。南紀草子は、南紀旅行で自分が「イイね！」と思ったところを書きました。ぜひこの本をまた読んでください。

3. 研究の展望

(1) つながりを意識した言語活動

子ども同士のつながり、子どもと教材とのつながりが生まれるような言語活動である必要がある。個の学びを深めるために、子どもたちが「他の子はどう思うのかきいてみたい」「自分の読みをきいてもらいたい」という思いをもつなど、人との関わり合いが自然となるような活動を取り入れる。そのようにして活動することを通して、つながりながら学ぶ良さを、子どもたちが感じられるようになってほしい。自分自身を見つめ直し、自己を変容させることができるようにしたい。教材の魅力を感じ、自らの学びのために教材を読む必然性のある言語活動にする。

(2) “ほんまもん”を活用する

学習者一人ひとりが、その単元の学習に主体的に取り組むようにするためには、学習者の興味・関心や問題

意識をふまえた学習課題を設定し、その学習課題の解決を目指して学習活動を展開することができるように単元を構想する必要がある。

学習課題は、①学習者の学校生活や学習生活の場において、学習課題となりうるもの、②社会の求めるものや国語科の教科目標などに照らして、子どもに興味・関心をもってほしいと思うことから設定することができる。①の場合は、子どもたちにとって最も身近な生活の場のことであるので、興味・関心は高いと考えられる。②の場合は、子どもが興味・関心を持つように出合わせることができるように、学習課題を設定することになる。

そこで、子どもが興味・関心を持つ学習材として、“ほんまもん”を積極的に活用したい。子どもたちが主体的に取り組むような学習となるために、“ほんまもん”(本物)の果たす役割は大きい。“ほんまもん”を活用することで、子どもにとっては「知りたい」「伝えたい」と言った意欲が高まり、学ぶ必然性のある学習となる。自分が選んだこと(本など)や地域教材など身近なものを教材化することで、子どもと学習材との距離が縮まり、子どもたちがより主体的に学ぼうとする姿が見られると考える。ほんまもんに触れ、そのことについて調べたり考えたりすることや、見学や体験を通し、興味関心が高まり、知りたい、調べたい、伝えたいという意欲が喚起される学習となる。

(3) 見通しと振り返りを大切にした授業づくり

ここで言う「見通し」とは、単元全体を見わたし、どのような学習をするのかを、子ども自身が把握することである。そのために、学年に応じて、内容、他者、目的、方法、場面、評価が意識できるような学習展開をおこなっていく。「振り返り」とは、自己の学びが学習前後でどのように更新されたかを意識するためのものである。

国語科の導入段階には、教材との出会いと、言語活動との出会いがある。まず、子どもたちが、教材を自分に引き寄せて主体的に学習を進めていけるように、教材との出会いを工夫する。例えば、「たぬきの糸車」(光村図書一下)であれば、昔話を教室に置いたり読み聞かせをしたり、昔の民家や本物の糸車に触れさせたりする。子どもと作品との距離を縮め、「早くこのお話を読みたい」と思わずにはいられないような導入にすることで、学習への関心意欲は高くなる。さらに、言語活動との出会いを工夫することは、子どもたちの学習意欲を喚起し、持続させるものとなる。ただ『たぬきの糸車』を暗唱しようと言うのではなく、言葉だけで語られた民話を実際にきいて民話の世界を楽しむことで、「自分にもできるかな」「やってみたいな」とこれから展開する学習に対する意欲をもって臨めるようにする必要がある。

また、子どもたちが振り返ることができるように、学びの足跡が見える工夫を大切にする。学習の終わりに書く振り返り作文、単元や授業の始めと終わりの音読を録音して聞き比べる、学習したことを教室に掲示するなど、学びの足跡を残して、自らの学習を振り返り、自己の変容を確かめる手立てを講じる。単元の終わりだけでなく、授業ごとの振り返りを大切にして、子どもが自分の学びをいつでもフィードバックできるようにする。

4. 研究の評価

1つの単元やそれぞれの授業において、発言やノート・ワークシートの記述内容などにより、現状把握、子どもの学びの変容を把握するよう努める。また、授業記録を取り、子どもたちの学びの実際をできる限り詳しく記述する。指導と評価が一体となるように、単元や授業という短期的な成果と課題に加えて、長期的な成果と課題についても把握を行う。方法としては、単元の始めと終わり、学期の始めと終わりに、国語科に対するアンケート調査を行う。さらに、単元における、または年間を通しての着目児を設定し、その子の学びの様相の変化を追い、子どもの生きる学習方法や支援の在り方について探る手立てとする。

(参考文献)鹿毛雅治(2007)「子どもの姿に学ぶ教師—『学ぶ意欲』と『教育的瞬間』—」教育出版

世羅博昭編著(2005)「6年間の国語能力表を生かした国語科の授業づくり」日本標準

国語科	がまくんとかえるくんの世界を楽しもう こだわり 2 A 音読げきだん	中村 正雄
2 年 A 組	「お手紙」	

1. 単元について

本教材は、がまくんとかえるくんという 2 人の登場人物を中心に展開されている。手紙が届いたことがないと悲観的になっているがまくんと、がまくんのためにこっそりお手紙を出して励まそうとするかえるくんの交流がとても温かい話である。はじめは不幸せな気持ちで手紙を待っているがまくんが、最後にはかえるくんと肩を組み合わせ、幸せそうな表情で手紙を待っているところから、がまくんの気持ちの変化を読み取ることができる。文中にある多くの会話文から登場人物の心情を読み取ることで、子どもたちが自ら音読の工夫に迫ることができると考えている。

2. 単元設定の理由

(1) 本実践の主張点

子どもが自分なりのこだわりをもって学習を進めることで、物語を想像しながら音読することができるであろう。

本単元では「並行読書した作品について音読劇をする」という目標を子どもたちに意識させた上で本教材「お手紙」を扱う。その音読劇では子どもたち一人一人にこだわりをもって取り組ませたいと考える。こだわりを持つことで物語に寄り添いながら学習することができるからである。ここで子どもたちにもたせたいこだわりは、大事にしたい文を決めるこだわり、決めた文を工夫するこだわり、シリーズの中から好きな作品を選ぶこだわり等である。「お手紙」の学習でこだわって読むところや音読の工夫について交流したり、シリーズ作品の中から選んだお気に入り作品を交流したりしていく。その中から一人一人のこだわりを見出し認めていくことで、子どもの「もっと読みたい」「うまく音読したい」を引き出したいと考えている。

(2) 教科提案との関わり

国語部では昨年まで対象、他者、自己との 3 つの対話の中で言葉の意味や働き、作品に対して自分の思いや考え、想像しながら読み進めていくことでその内容を追究していく力を身につけさせてきた。本年度は「つながりを意識して考える力を育む」を研究テーマとして学習とのつながりを大切にしていけるよう取り組んでいく。学習における子どもたちの「もっと読んでみたい」「自分の考えを伝えたい」「友だちの考えを聴いてみたい」といった内在する欲求を教師がみとめる。みとったことを学習活動に生かしていけるように教師が支援し、学習とのつながりを深めていくことで自己の学びを深めることができるからである。

3. 単元目標

- ・「がまくんとかえるくん」シリーズからお気に入りの物語を選び、場面の様子や登場人物の様子が表れるようにこだわりを持って音読することができる。
- ・「がまくんとかえるくん」の物語の様子を豊かに想像しながら読むことができる。

4. 単元計画(全13時間 本時7/13)

			主な学習活動
学習の見通しをもとう	第一次	第1時	教師が「お手紙」を音読し、音読劇への興味を持たせる。 感想を交流し合う
		第2時	学習課題を設定し、学習の見通しを立てる
「お手紙」のこだわり音読ポイントを交流しよう	第二次	第3時	「お手紙」クイズを通しておおまかな内容をつかむ。
		第4時	登場人物の気持ちが伝わるようなこだわりの音読ポイントを探す。
		第5時	がまくんが不幸せな気持ちで待っている場面のこだわり音読ポイントを交流する。
		第6時	かえるくんがかたつむりくんにお手紙を出す場面のこだわり音読ポイントを交流する。
		第7時 【本時】	がまくんとかえるくんがお手紙について会話のやり取りをしている場面のこだわり音読ポイントを交流する。
		第8時	幸せな気持ちで座っている場面のこだわり音読ポイントを交流する。
音読劇をしよう	第三次	第9時	並行読書した作品から場面の様子や登場人物の気持ちが伝わるようなこだわり音読ポイントを探す。
		第10時 第11時	ペアでこだわり音読ポイントを話し合い、音読劇の練習をする。
		第12時	ペア同士で音読劇を発表し、アドバイスする。
		第13時	音読劇を発表し、振り返りをする。

5. 本時について

本時では子どもたちが、がまくんやかえるくんの気持ちが聞き手によく伝わるような音読ポイントを交流する。「わたしは〇〇を大事に読みたい。それは△△だからです。」のようにこだわりを持つことで登場人物に寄り添うことができると考えている。また、選んだ音読ポイントを理由とともに交流することで文章に着目することができる考える。友だちのこだわりを聞くことで意見が変わったり、自分の考えが深まったりする姿をみとっていきたい。音読する際には自分が選んだところを「このように読んでみたよ」と工夫する姿勢を通して音読への意欲付けにつなげていく。がまくんやかえるくんの様子や気持ちを想像しながら学習に向かうことができる姿が見られることを願っている。

国語科 4年B組	映像と言葉で伝えよう！ ～みんなに届け！「わかやまポンチ」CM～ 「アップとルーズで伝える」	中岡 正年
-------------	--	-------

1. 単元について

導入場面に総合的な学習の時間で子どもたちが取り組んできた活動をCM化した映像を視聴する。その仮CMをより豊かにするために「アップとルーズで伝える」の説明文を読み、内容の理解を深めることが本単元である。

本教材の「アップとルーズで伝える」は写真と文章が対応されており、段落ごとに書かれている内容が明確で、対比関係がよくわかる文章構成になっている。このことによって、「アップ」や「ルーズ」、それぞれの長所、短所について理解しやすくなっているといえる。

総合的な学習で取り組んできた自分たちの活動の映像作品をより改善する課題を設けることによって、説明文を読む意識を高め、子どもたちが、必要性をもって本教材を読もう、理解しようとする学習の場面にしたいと考えている。

2. 単元設定の理由

(1) 本実践の主張点

映像作品を改善する課題を設けることで、写真と文章を対応させた本教材を主体的に読み、進んで映像の効果や文章を精査する姿が見られる。

本教材の「アップとルーズで伝える」は私たちがよく目にしているテレビの映像技法を中心に述べたものである。様々なメディアを通して、私たちが受けとっている情報が一定の価値判断や作り手の意図に基づいて作成されていることに気づかせ、自分たちが伝えたいものを表現するには何が重要なのかを考えさせたい。

CMのもとになっている映像は、総合的な学習において一学期から取り組んでいる「わかやまポンチ」の学習活動のものである。

「わかやまポンチ」は和歌山県産の梅や果物を広くアピールする目的で、和歌山県食品流通課と本校が共同で行っている取り組みである。その「わかやまポンチ」の活動は子どもたちが意欲的に取り組んできた活動であり、学級コンペを経て商品化にむけて計画が進んでいる。それ故、思い入れも強く自分たちが伝えたい思いや他者に伝えたい部分も明確であると考えられる。

このことは、使用されている写真はアップとルーズのどちらが自分たちの思いを伝えるのにより適切なのかを判断する基準となり得る。

さらに、仮CMをより思いが豊かに伝わるCMへと改善を行うことは、筆者の伝えたいことを読むことに必然性をもち、文章を読み進んでいくことになる。

(2) 教科提案との関わり

本年度の国語科部は「つながりを意識して考える力を育む」をテーマにしている。学習の「つながり」とは子どもの「知りたい」「読みたい」「聞きたい」「伝えたい」といった意欲的な活動や思いが、単元を通して継続されることと捉えている。

本単元では、総合的な学習で取り組んできた活動が、国語科への学びへと活かされることになり、教科を越えて、学び続けることになる。それは、何かを得るために文章を読み進め、他者の考えに触れ、自分の知識や知恵としていくことであり、自然な学習のつながりともいえる。

また、説明文で学んだ表現や文章の構成が自分たちの経験へと生かされていくようにしたい。

3. 単元目標

- ・写真と文章を対応させて、説明的な文章に興味をもって読もうとしている。【関】
- ・写真と本文の対応関係を理解することができる。【読(1)】エ
- ・それぞれの段落の役割を、本文の内容から理解することができる。【読(1)イ】
- ・書いたものを発表し合い、書き手の考えの明確さなどについて意見を述べ合うことができる。【書(1)イ】

4. 単元計画(全12時間 本時10/12)

		主な学習活動
第一次	第1時	仮のCMを視聴し、感想を伝え合う。
	第2時	教科書の「アップ」と「ルーズ」の写真を見比べ、それぞれの写真からわかることを話し合う。
	第3時	本文を通読しCM改善に活かすことを確認する。
	第4時	写真と文章が対応していることを確認し、どの段落に何が書かれているのかを確認する。
	第5時	それぞれの段落の内容を短くまとめ、文章全体の中での役割について考える。
	第6時	「アップ」と「ルーズ」の効果や長所と短所についてまとめる。①
	第7時	「アップ」と「ルーズ」の効果や長所と短所についてまとめる。②
	第8時	筆者の主張点を確認する。
第二次	第9時	仮CMの改善点について考える。
	第10時	仮CMについての改善案をお互いに交流する。 本時
	第11時	仮CMの改善を行う。
	第12時	お互いのCMについて感想を伝え合う。

5. 本時について

本時は、教材文を読み「アップ」と「ルーズ」のそれぞれの良さと筆者の主張について確認した後、「わかやまポンチ」の仮CMをより魅力が伝わるものにしていくために改善案を交流する場面である。お互い十分に意見を交流するためにも、前時の一人学習において自分の考えを明確にもたせておく必要があると考えている。

一人学習で考えてきた、改善案をまずは、小グループで検討し、次に各グループ間での検討の場面としていく。そして、全体で自分たちの考えを集約していくことを考えている。個の思考から全体での意見の共有、検討とすることで子どもの言葉で学習が展開されると考えている。

自分たちの活動の良さや「わかやまポンチ」をより良く伝えるための、効果や工夫について意見を交流する場面では、自分の考えの根拠を「アップとルーズで伝える」の本文に書かれていることをもとに示させたい。

次時に仮CMを改善する活動を予定している。本時はそこにつながるように、選択された写真から伝えたい情報を相手に明確に伝えるにはアップとルーズどちらの効果を用いた方がより適切なのか、限られた時間の中で、魅力が伝わるキャプションは何かなど具体的なイメージをもつことができる時間としたい。

国語科 5年A組	お気に入りの人物を動画アプリで伝えよう 「百年後のふるさとを守る」	湯浅 明菜
-------------	--------------------------------------	-------

1. 単元について

本単元は、伝記を読み、そこに描かれている人物に関する出来事や、物の見方や考え方に触れ、共感するところや尊敬するところについて考えるものである。学習指導要領には、「C読むこと」の言語活動例として「ア 伝記を読み、自分の生き方について考える言語活動」を挙げ、「伝記に描かれた人物の行動や生き方と、自分の経験や考えなどとの共通点や相違点を見つけ、共感するところや取り入れたいところなどを中心に考えをまとめるようにすることが大切である」としている。

5年生の子どもたちが、ある人物の考え方や生き方について考え、さらに、自分の生き方について考えるようになるためには、まず、自分にとって興味のある人物や分野について読むことが大切である。題材に興味があることで、伝記を読む動機づけとなる。そこで、本単元では、共通教材「百年後のふるさとを守る」と、自分で選んだ伝記の2つを読むこととする。

普段伝記を読む機会の少ない子どもたちが、ある人物の考え方、生き方を探ろうとする姿がみられるようになる学習としたい。

2. 単元設定の理由

(1) 本実践の主張点

自分の興味関心のある人物について伝記を選び、番組形式にして紹介するという目標をもつことで、その人物の生き方について探ろうとする姿が見られる。

本校児童全体の特徴と言えるが、5Aにも本好きな子どもが多い。怪傑ゾロシリーズを好んで読む子もいれば、学習漫画、児童文学、ライトノベル、一般小説を読む子など、高学年の読書の多彩さと個人差に驚いた。1年生時から保護者ボランティアにより読み聞かせをしてもらっており、今も月2回の読み聞かせを楽しんでいる。

読書があまり好きではない子にとっては、これまで読んだことのないジャンルに自ら手を伸ばしにくいものである。学習漫画の伝記を好んで読んでいる子どもも数名いるが、まったく読んだことのない子もいる。

そのように、伝記にあまり触れることのない子どもたちも、伝記を楽しく読む姿を見せるようになるためのきっかけとして、それぞれの興味関心のある分野、人物から本を選ばせたい。

また、本学級では、総合的な学習の時間において、学校紹介番組作りを行っている。設定した題材について見る人に何を伝えたいかを意識して内容を決定し、原稿を作成、自分たちで読むという過程を経て番組を作る。

本単元においては、伝記に書かれた人物についての紹介動画を作る。自分が一番伝えたいことは何かを考えるために、その人物のしたこと全体をながめ、それぞれの業績について何度も読もうとすることが期待される。そうすることで、人物の生き方、考え方について自らの考えを深めていけると考える。

(2) 教科提案とのかかわり

本年度、国語科では「つながりを意識して考える力を育む」をテーマとしている。ここで言う「つながり」とは、言葉のつながり、他者とのつながり、学習のつながりととらえてきた。今年度は、特に学習のつながりに重点を置いて研究を進める。学習のつながりとは、単元内で子どもと教師が見通しをもちながら進めていく学習であると考えている。子どもが「知りたい」「読みたい」「伝えたい」と思えるような学習活動を展開していくのである。学習のつながりを子ども自身が意識できるようにしながら、考える力を育もうとするものである。

本学級では、「イイね!」を合言葉に、良いと感じるところ、新たな発見、共感するところを見つけながら学習に取り組んできている。伝記を読んで、人物の生き方、考え方の「イイね!」を

見つけ、まとめ、動画にすることで、何度も伝記を読んで確かめ、その人物に対する自分の感想をもつことを期待している。

3. 単元目標

- 紹介番組作りを通し、伝記に興味を持ち、進んで読もうとする。【関】
- ◎自分の伝えたいことを中心に、人物に関する出来事、生き方や考え方について書き、人物に関する出来事、考え方について感想をもつ。【読（１）ウ】
- ◎読んだ人物について自分の感じた「イイね！」を発表し合い、友だちの感じ方、考え方から、自分の考えを広げたり深めたりする。【読（１）オ】
- 伝記は、ある人物の生い立ち、業績、生き方や考え方という構成でできていることについて理解する。【言（１）キ】

4. 単元計画 全 11 時間（＋総合的な学習の時間） 本時 6 / 11

学 習 過 程	
第1次 伝記を読んでみよう ①伝記が好きな子に、伝記のどんなところが好きなのか聞く。自分が選んだ人物についての紹介動画を作ることを単元の目標とする。 ②図書室で、自分が読みたい伝記を選ぶ。	並 行 読 書
第2次 浜口儀兵衛の「イイね！」を伝えよう ③伝記からどんなことが分かるのか（生い立ち、エピソード、考え方）、儀兵衛の何が「イイね！」と思うのかという視点で「百年後のふるさとを守る」を読む。「イイね！」と思うことを書く。 ④儀兵衛のどんなところが「イイね！」と思うか話し合う。 ⑤グループで、儀兵衛の「イイね！」を伝える文章を作る。 ⑥【本時】儀兵衛の生き方、考え方について自分は思うかについて話し合い、感想文を書く。 ⑦儀兵衛の紹介文と感想文を読み、録音する。 ○動画アプリを使い、グループで儀兵衛の紹介動画を作る。（総合的な学習の時間）	
第3次 お気に入りの人物を動画で伝えよう ⑧⑨自分の読んだ伝記の人物について、紹介文を書く。 ⑩自分の原稿を読み、動画にする。 ⑪互いに動画を見合う。	

5. 本時について

「百年後のふるさとを守る」は、濱口儀兵衛についての伝記である。本教材は、（１）過去の小学校教科書に掲載された「稲むらの火」の一節、（２）濱口儀兵衛と「稲むらの火」の実話部分、（３）堤防づくり、（４）儀兵衛の業績に対する筆者の考え、という構成になっている。

儀兵衛の業績として、稲むらに火をつけたことと、堤防を作ったことの２つが描かれているが、堤防作りの中でも２つに分けられ、儀兵衛の業績として次の３つが描かれている。①津波の後、暗くて逃げ道を見つけられずにいた村人に方向を示してやるために、大切な積みわりに火をつけたこと。②儀兵衛と儀兵衛の店が材料費も賃金も全部出し、村人自らの手で堤防を作るようにすることで、村人の流出を止めた。③江戸で地震が起こって家業がかたむきかけ、堤防と家業のどちらをとるか迫られたが、堤防を完成させることを決断し、堤防の完成と家業の盛り返しを達成したこと。

儀兵衛は、村人のため、村全体のために行動した。子どもたちの多くは、そこから儀兵衛の生き方に触れてくるであろう。業績全体を遠景からとらえるだけではなく、儀兵衛のどの行動、言葉に着目して自分の感想が引き出されているのか、さらに焦点を絞って考えさせたい。